

国への傷は少なくないと思われる。銘記しておくべきことであろう。

被爆からあと5年で50年になる。30年の時に、正確には昭和49年8月6日に広島大学の

追悼碑が除幕され、昭和50年に「生死の火」が刊行された。この供養も50年忌まで続けられるであろうか。

文責と世話人：歯学部 菅野義信

## 第29回オマール氏法要

原爆放射能医学研究所 宇吹 暁



9月2日11時、京都市一乗寺の円光寺で、サイド・オマール氏（マレーシア出身の南方特別留学生、広島文理科大学在学中被爆、昭和20年9月3日京都で死亡）の45周年目の供養が営まれました。また、墓前での法要終了後、修学院の平八茶屋本店で懇親会が持たれました。



参列者は17名、広島からは、故人と生前親交のあった菅野義信（本学歯学部教授）・吉川英子・中村千重子の御三方と小笠邦久御夫妻、中野伍法・経済学部事務長補佐、それに私の7名が参列しました。

私は、広島大学原爆死没者慰霊行事委員会から派遣されての初参加でしたが、法要に、先だつ30分ほどの間と懇親会の席で、世話人である園部宏子様より、参列者の皆様の故人との関係を丁寧に説明していただきました。はるばる東京から参加された上遠野寛子様は、故人の来日当初に日本語教育などのお世話をされた方とのことでした。今年8月3日のジャパンタイムズは、「マレーシアの原爆被爆生存者、日本との深い関係を発展させる」などの見出しで、南方特別留学生についての特集を掲載していましたが、上遠野様が持参されたこの記事のコピーを囲んで、参列者は改めて往時を偲びました。また、数年前より京都大学工学部がマラヤ大学と学術交流を行っていますが、その関係から得丸英勝同学部長が参列されていました。私は、あらかじめ「天の羊—被爆死した南方特別留学生」（中山士朗著、三交社刊）を読んでいました。しかし、この一日の体験は、書物からの知識では得られない貴重なものでした。